

取組実績の概要 【2ページ以内】

近年の医学・保健学分野も他の専門分野と同様にグローバル化が進んでいる。そのため、感染症などの疾病や健康啓発活動など検査、治療から予防に至るまでの様々な医学・保健学分野における諸問題の解決のために多国間の政府関係者や医療関係者などが協力・協働していくことが求められる。その際に、中心的な役割を担い、問題解決のためにリーダーシップを発揮することができるグローバルリーダーが求められる。医学・保健学分野におけるグローバルリーダーは、医学・保健学に関する専門的な知識・技術はもちろん、海外とのコミュニケーション能力、リーダーシップ、各国の医療制度・文化等に関する知識など様々な能力が求められる。そこで、本事業では、**神戸大学、大阪大学、インドネシア大学、ガジャマダ大学、アイルランガ大学、マヒドン大学、チェンマイ大学、WHO健康開発総合研究センター（WHO神戸センター）、兵庫県立健康生活科学研究所（Hyogo-IPHES）の計7大学・2機関がコンソーシアムを構成し**、世界の医学・保健学分野で活躍するグローバルリーダーとして必要とされる能力の涵養をめざした多層的なプログラムを展開した（後にコンソーシアム以外にも拡大し、11大学を追加した。）。主に医学部最終学年を対象とした病院実習プログラムでは学生が興味関心や将来的に活躍したいと考える診療科での研修をおこなった。大学院生を対象とした、単位を取得するプログラムでは学生の専攻分野に関する研究や調査を、派遣先の研究施設などでおこないながら単位の取得を目指した。さらにコンソーシアムを構成する大学から神戸大学大学院に学生を受入れ、博士号の取得を目指す学位取得プログラムを実施し、平成28年3月には本プログラム初の博士号を取得した学生が誕生した。これらのプログラムでの経験を通じ、医学・保健学分野における世界水準の専門能力、ASEAN諸国の課題への的確な問題解決能力及び世界の現場で駆使できる英語コミュニケーション能力を身に付けるきっかけや経験とすることで、アジア及び世界の第一線で活躍できる医師、教育研究者、高度医療専門職者及び医療産業人（製薬/ワクチン企業の研究職・医療コンサルタント）など将来的には医学・保健学分野で活躍できるグローバルリーダーへの成長につながると考えられる。

本事業のプログラムへの参加学生数は、派遣・受入学生数とも構想時の予定人数を上回り、順調にプログラム運営をおこなうことができた。また、学生交流の活性化に伴い、より進化した学生交流を目指し、マヒドン大学シリラート病院医学部やガジャマダ大学医学部と神戸大学大学院医学研究科の間では、ダブルディグリープログラムに関するMOUの締結がおこなわれ、カリキュラムや学生の選抜方法などに関する話し合いがおこなわれている。また、プログラムをより充実したものとするため、派遣学生については、派遣前教育として本プログラムの運営に関わる教職員が、研修先決定のための相談や情報提供をおこなうとともに、派遣先での学業や生活により早く順応できるようにするため、本プログラムの修了生で運営に関わる若手教員が生活上の注意点などを学習するための派遣前講習会を開催した。受入学生については、留学生の学業や日常生活の補助をおこなう学生として日本人学生を雇用する留学生バディ制度（旧称：留学生チューター制度）を採用し、留学生と日本人学生が交流を促進するための取り組みをおこなうとともに、本プログラムの運営に関わる若手教員や神戸大学留学生センター（現国際教育総合センター）の教員が中心となり、受入学生が日本の文化に親しみを持ち、将来日本とASEAN諸国との架け橋となる人材に成長することを目的として、日本語や日本文化を学習できる日本語日本文化クラスを開講した。また、このクラスをより発展的にし、留学生だけではなく日本人学生も参加できるようにするため、平成28年度には英語によるディベートクラスを開講し、日本人学生と留学生が英語を用いて医学に関するテーマでの議論やお互いの国の医療制度や文化に関する意見を交わし、理解を深めるための機会や英会話能力向上の機会とすることができた。

本プログラムの活動については、プログラムホームページを日本語および英語で作成し、イベント情報や参加学生のレポートを公開することで得られた成果の発信に努めた。また、医学・保健学分野やNP0等の専門家等により構成された外部評価委員会でプログラムの内容や計画、得られた成果について客観的に評価・検証を受け、それに対する助言を受けることで、事業計画の改善についても努めた。

神戸大学医学部では本事業が終了した平成29年度以降も、6年次の個別計画実習としての学部学生の海外派遣やElective Programとして海外から学生を受入れる予定としているとともに、本事業の運営で中心的な役割を担っていたグローバルリーダー育成センターを平成29年3月末で発展的に解消し、平成29年4月から「次世代国際交流センター」を設置し、これまでの成果を基に海外との交流を進めている。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

	平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		合 計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	8人	3人	21人	18人	24人	23人	31人	36人	44人	45人	128人	125人
実績	11人	3人	24人	23人	28人	38人	27人	55人	39人	48人	129人	167人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】

平成24年度に3か月間インドネシア大学へ派遣された博士課程の学生が、その経験を活かして平成26年度から本事業の運営に携わった。

また、平成25年1月にインドネシア大学、平成26年4月にアイルランガ大学で開催したセミナープログラム参加学生として派遣した博士課程の学生1名が、平成28年10月から神戸大学医学研究科の特命助教として採用され活躍している。さらに、平成25年度にプログラム（病院実習）に参加した学生が受入時の指導教員と共同で国際学術誌に発表した。（Amin, H. Z., Mori, S., Sasaki, N. & Hirata, K. Diagnostic approach to cardiac amyloidosis. The Kobe journal of medical sciences 60, E5-E11 (2014).）

ガジャマダ大学から神戸大学保健学研究科に受け入れた学生1名（学位取得プログラム）が平成28年3月に保健学博士の学位を取得した。

神戸大学医学研究科にインドネシア大学から受け入れた学生1名（学位取得プログラム）及びガジャマダ大学から受け入れた学生2名（学位取得プログラム）についても、医学博士の学位を授与する予定である。

そのほかにも、受入学生の学業や生活補助を行う留学生バディとして採用された学生が、派遣学生に選抜されたり、それ以外の学生についても留学や海外の医療制度等に興味を持ち、多くの学生に良い影響を与えることができた。受入を行った学生についても、自主的に現地で日本からの派遣学生の学業や生活の補助を行う等、派遣学生の学習・安全面で貢献している。

また、グローバル医療保健人材の育成のためには、大学での教育と同時に、現場での臨地経験が不可欠である。特に保健学の分野（看護学、リハビリテーション科学、臨床検査技術科学）では病院ならびに地域での経験が大変重要となる。本プログラムでは、現場での臨地経験をj得るための豊富な病院実習、研究所での演習、地域健康センターでの健康診査、インターンシップを準備し、大学で修得した学問の知識とスキルを実践の場で生かす機会を与え、より実践的な知識とスキルを獲得するとともに、チャレンジ精神とコミュニケーション能力を養うことが高い次元で実施できた。日本の医療専門職者（看護師、臨床検査技師、作業療法士、理学療法士）が、アジア諸国において、日本であまり見られない病気やその治療を実習したり、保健医療制度の相違を直接知ることができたり、また、地域において、住民と触れ合い、語り合い、健康状況の把握と保健指導ができたことも大変意義深い成果である。さらに、学生にとって、これらの実習が単位認定されたことは、大きなモチベーションになっていた。